



終結のなかの発端

世界を歩く

小田 実



河出書房新社

著者略歴 1932年大阪に生れる。57年東京大学文学部を卒業。58年フルブライト留学生としてハーバード大学に留学。「ベ平連」代表。小説『明後日の手記』『わが人生の時』『アメリカ』『泥の世界』『現代史(上下)』(以上河出書房),『大地と星輝く天の子』(講談社); 評論『日本を考える』(河出書房),『壁を破る』(中央公論社),『戦後を拓く思想』『平和をつくる原理』(以上講談社),『義務としての旅』(岩波書店),『日本の知識人』『人間・ある個人的考察』(以上筑摩書房); 旅行記『何でも見てやろう』(河出書房)他。

世界を歩く 終結のなかの発端

*著者 小田 実 *装幀者 真鍋 博
*発行者 中島隆之*印刷所 堀内印刷株式会社
*製本 美行製本有限会社 *発行所 河出書房新社 東京都千代田区神田
小川町3—6 *振替口座(東京) 10802 番
1969年5月25日印刷 1969年5月31日初版発行

定価 560 円

終結のなかの発端・目次

第一章	「全体小説」に対する「全体旅行記」について	7
第二章	私の北方、すなわち、日の丸と赤旗とダイヤモンドについて	29
第三章	「政治的」というやっかいなことからについて	45
第四章	ソ連とアメリカでは詩人が金持だということについて	62
第五章	五年前にくらべて、十年前にくらべて、ということについて	84
第六章	彼ら、あるいは、革命と人間と大地について	104
第七章	未来がかたちづくる風景について	123
第八章	党について、社会主義リアリズムについて、人類について	141

第九章 「アジアの魂」、そして、「西洋」と「東洋」について 163

第十章 「おろしあ」とのさまざまなかわりあいについて 182

第十一章 日露戦争と私たちのかかわりあいについて 201

第十二章 人間は何国人に生まれたらよいか、について 216

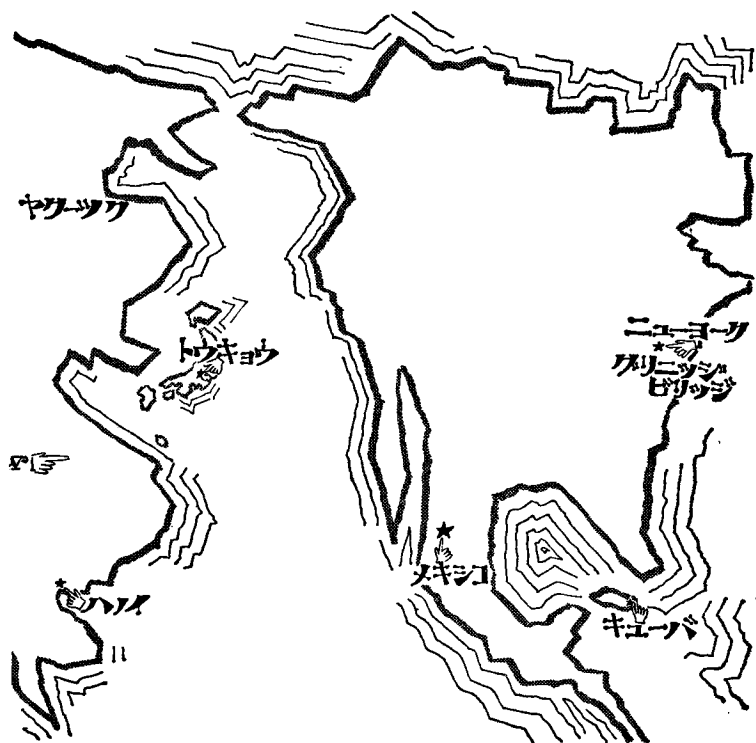
第十三章 革命博物館のなかのスターリンについて 233

第十四章 むすびにならないむすび 257

附 録 動きとことばと声と 271

あとがき 287

かの発端



世界を歩く 終結のな



第一章 「全体小説」に対する「全体旅行記」について

私には、ふしぎなくせがある。趣味と言ってもよい、あるいはもっと高級に、それこそ私の思考の基礎をなすものだと言ってもよいが、それほど意識的ではなく、もっと身についた日常的な感じで、これは、やはり、くせというこぼを用いて言いあらわすべきことがらであるのだろう。ものを書きながら鼻をこすったり、おじぎをするとき上体を心もち右にかたむけたり、なくて七くせ——そんな感じのくせだ。

どこかへ行く。それは用事のためでも、純粹に旅を楽しむためでもなんでもよいのだが、あるいはまた、そのどこかがニューヨークであろうと花のパリーであろうと、ブリザードの吹きすさぶアイスランドのレイキャベック、万物すべて燃えに燃えるインドのベナレス、それとも、私の住む東京の一角であってもよい、とにかく、それまで未知だった領域に足を踏み入れるたびに、私はきまって次に述べるような奇妙な想念のとりことなるのだ——もし、私がここに住むなら、この地の人間なら、どんな人生を送っていることになるか。

いや、それは想念というよりは感覚といったものだろう。そのことを意識した瞬間には、私は、すでに、そこに住むもう一人の「私」の眼でまわりの事物を見はじめていて、すでにそのことを生れおちたときからやって来ているような気がして、あらためて私はそのもう一人の「私」とのくいちがひ、距離を感じることによつて、それが自分の土地ではない、自分にとっては異質の土地であることを再確認する。――

たとえば、想像上のもう一人の「私」は、現実の私が漫然と眺めている三階建てのアパートのいっとうはしの緑色のカーテンの部屋に住んでいることだろう。カーテンのすみから顔を出した茶色の髪の女は、「私」の妻だ。そして、「私」は、もう時刻はお昼近くで、今は、街の中心の事務所から昼飯のためにわが家に帰つて来ようとしている。ということは、ここはイタリアかスペインかギリシアか、人々がまだのんきに中世以来のゆったりした伝統のなかに生きていて、昼にはゆったりと飯を食べ、酒を飲み、どちらもいっぱいに食べ、飲み、それで、自然、眠くなり、「シエスタ」、つまり、昼寝をする。十二時から四時まで。あるいは、ときとして、五時まで、街はどこでも眠り、歩いているのは、昼寝の伝統の外に生きている不幸な外国人の観光客ばかり。ということとは、日本人の私もその外国人の一人だというわけで、それで、仕方なく、せめてものことに、道ばたのカフェの椅子に腰を下ろして、緑色のカーテンをしょさいなげに眺めているのだが、そのときには、イタリア人、あるいは、スペイン人、あるいは、ギリシア人であるもう一人の「私」はカフェの見知らぬ日本人にちよつと眼をとめて、すくなくとも容貌、もしくは、彼の周囲にただよう空気の類似におどろくのだが、もちろん、そんなことに頭をつかつている余裕は「私」にはない。まず、「私」

は腹をすかせている。「私」はおそらく弁護士で、朝からつめかけた客との応対につかれている。あるいは、「私」はその国での革新的な考え方をする一団の人たちの一人で、それがイタリアなら、そこは世界に名高いイタリア共産党があるところで、自分がコミュニストであると公言したところ、どうということもないが、スペインやギリシアでなら、どうだろう。スペインなら、もちろん、そこにあるのは、南国の陽光のように輝かしいイタリア共産党ではなくて、その陽光が壁にさえぎられてつくり出す強烈なくらい影である独裁者フランコなのだ。「私」は明日にも逮捕されるかも知れなくて、そして、その「私」を待つのは、ひょっとすると、死だ。

ギリシアでなら、どうか。お昼近くなると、そういった南国の大都会では、朝の出勤時につづいて、昼頃、「シエスタ」のための退勤時のラッシュ・アワーがはじまるのだが（四時、五時、街は、ふたたび、勤め先へ出かける人々でごったがえして、第三の出勤のラッシュ・アワーとなる）、そのラッシュ・アワーの雑踏のなかで、「私」は、ふと、雑踏がいつもより激しいことに気づく。そして、つぶやくにちがいない。あっ、バスのストライキだな。

ギリシアでは、すくなくとも、軍部専制の現今まれなる政治体制をもつ現在の、（ということとは、この国では、時計の針がさかさにまわっているということだ）ギリシアでは、アテネ市内唯一の公共交通機関であるバスがストライキをするとどういうことになるか。すぐ軍隊が出動して来て、バスのハンドルを彼らがとって、つまり、スト破りを行なう。それで、このスト破りを防ぐ唯一の方法としては、予告も何もしなさに、突然、短時間の部分ストライキをやる以外にはない。たとえば、お昼のラッシュ・アワーのときをねらって。

で、そのギリシア人になった「私」が郊外のアパート、緑色のカーテンの室に帰ろうとすると、街はえらくごったがえして、バスに乗ろうとしても乗れない。仕方がないからタクシーに乗ろうとしても、一台もつかまらない。いや、もうそのときには、「私」はギリシアでは金持階級にぞくする弁護士などではなくて、どこかの会社の下っぱ社員で、タクシーに乗るお金などないのかも知れない。では、歩くとするか。

その歩く「私」の眼の遠く達するところには、アクロポリスがそびえて、むろん、そこにどっしりとあるのはバルテノンだが、ひょっとすると、いや、おそらく、一人の外国の観光客ではなく、ギリシア人である、ギリシアの生活者である「私」がそれを見て考えているのは、紀元前何世紀とやらのわが祖先の栄光ではなくて、もちろん、わが家計の不如意であろうが、同時に、私が現在の軍部の政治支配をいきどおるほど十分に革新的であるなら、かつて、ドイツ占領時代にそのアクロポリスの頂上にひるがえっていたハーケン・クロイツの旗をひきずり降ろした、ある朝、ドイツ軍もアテネ市民も眼ざめてみると、一夜のうちにその旗が消え去ってしまったのを知ったのだが、それをひきずり降ろした青年のことではないか。そのあと、いろんなことが、ギリシアにはあった。まず、レジスタンスの輝かしい勝利。——ギリシア・レジスタンスは、フランスのレジスタンスとちがって、自力で占領軍を駆逐したという栄光をもつが、勝利したときには、もう、敗北がはじまっていて、予期した革新政権の代りにババンドレウーのブルジョア政権が確立して、イギリスから王様がまいもどって来て、ソビエトがレジスタンス派を見捨てて、イギリスの王様援助、アメリカの王様援助がひきつづいて、すべてがつぶれ、そして、数年前、図にのった王様は、パバ

ンドレウーさえ追放してしまった。彼の追放を契機としておこった王制反対を叫ぶデモ、集会が自発的に国中におこったが、あれも、そのままで終って、いや、それどころか、事態はさらに悪化して、その王様さえも追い出したかたちで、軍部の独裁が始まった。「私」はそんなことを考えていて、そして、ため息をつく。さて、これからどうなるのか。ギリシアという国も、その国にぞくする「私」も。――

*

*

*

あるいは、ひょいと、私は「私」を過去の人物に擬することもある。たとえば、アクロポリスの下のアゴラを歩いていて、ああ、これが昔のギムナシオンの跡だな、と思っているうちに、いつのまにか、私は、そのギムナシオンへひと汗流しにやって来たアテナイ人カルキデスになって、ほんとうにレスリングをやってひと汗流しに来たのか、それとも、それはたんに口実で、真実のところは、美少年探しにやって来たのではないか。とすると、「私」はもう四十がらみのヒヒ親爺というところで、風貌はひょっとするとソクラテスそっくりだったかも知れないが、中身はもちろんちがって、たとえばソクラテスが世の森羅万象に思いをめぐらしているとするれば、「私」は「私」で、いまスバルタとやっているペロポンネソス戦争でいかにしてひと稼ぎやってのけるか、それでもって、キュノサルゲス近くに囲ってある美少年ミリップス（には、もう、「私」はあきあきしている）に手切金をしこたまやって……というようなことを考えていて、このような「私」は、のちにソクラテスの裁判の陪審員となつて彼を死刑に追いやるのだが、そういった顛末は、現実の、つまり、

この文章をいま書きつづっている私が書いた小説『大地と星輝く天の子』のなかにしこたまあるが、実際のところ、私とその小説の具体的構想を得たのは、ギリシアに旅して、アゴラに自分の身をおいたときなのだ。そのとき、すでに、私は「私」に変身して、その小説というのは、その「私」に共感し類似し、同時に、背離し嫌悪していた私と「私」の共同作業によってつくられたものにほかならない。いや、事態はもう少し複雑であって、そこにいたのは、日本人の旅行者である私と古代アテナイ人の「私」のほかに、その「私」の直接の子孫であるにちがいない現代ギリシア人の「私」もいて、彼は彼で、自分の祖先と自分のあいだの共感、類似、背離、嫌悪のなかで、ギュムナシオンの遺跡のまえに立っていたのかも知れない。そして、さらに、彼は、ひょっとすると、ギリシア・レジスタンスの闘士で、今はアテネの片隅で働く一市民で、しかし、彼の書斎には、ギリシア語版のマルクス、レーニン、トロツキー、毛沢東やらが並んでいて（私はほんとうにそういった友人をギリシア人のなかに幾人かもつが、ギリシア語版のレーニンやトロツキーや毛沢東は、いつ見ても、いかにも奇妙な気がする。私がそれを言うと、彼らも、日本語版のものについて同じことを言った。ついでに言うと、現代ギリシアの大学生のなかでもっとも人気のある人物の一人は、トロツキーであって、ギリシアの学生運動の主導権はトロツキストの手中にあると言ってよいだろう）、そして、彼のふところには、お金がまるつきりない。

いや、ことは、ただの三人の「私」にとどまらない。それぞれの私、「私」、「私」のまわりには、もろもろの現代日本人、古代アテナイ人、現代ギリシア人がむらがって生きていて、私、「私」、「私」の三人ともどもがそのむらがり網の目のなかに足をとられてしまっていて身動きならない。

早い話、現代日本を象徴する一つのものである平和憲法を擁護しようとする考えと行動をもつ私という現代日本人のすぐ横には、そんなものは止めてしまえ、明治憲法に今すぐにも復讐させよと叫ぶ現代日本人もいれば、ベトナム戦争反対の運動を積極的におし進めている私を、あのベトナム祭り屋めが、と冷笑する知識人もいる。第二番目の「私」のまわりにも、その「私」が進歩派だとすると、「私」のような進歩派のことを何かと言えば冷笑するアリストパネスのような老人もいたのにちがいないのだし、第三の「私」の横には、冷笑するどころか、「私」をつかまえて牢屋に送り込もうとする秘密警察の手先がいるかも知れないのだ。なにしろ、共産党は非法法だという社会で、王様のクーデタ以来、一年のあいだだけで、牢屋にはうり込まれた人間は、千の単位いるということだ。そして、もちろん、そのまた横には、世界一の大金持アリストテレス・ソクラテス・何某といった大人物のワイフである美女が、花のパーリーかローマで買って来たものにちがいない膝上十センチにも二十センチにもなる小さな子供のスカートののように短い派手な原色のミニ・スカートを着て、ウサギのようにはいしゃいで小走りに歩いていて、それをぼんやりと眺めているのは、昨日ペロポネソス半島の山奥から職を求めて流れて来た中年男で、彼のそばには、無言でへたり込んでいるワイフ、汗まみれになって眠りこけている三人の子供。

もちろん、現代日本にも、古代アテナイにも、そういう美しきミニ・スカートの美女、くたびれてた中年男、ワイフ、三人の子供にもことかいてはいるはずはなく、つまり、会話は、あるいは、交流、共感、それとも、会話の断絶、無交流、無共感、私↓「私」↑「私」というタテの系列、私↑平和憲法拒否の男↓ベトナム祭り屋と冷笑する知識人↑美しきミニ・スカートの美女↓くたび

れはてた中年男↓そのワイフ↓子供、「私」↓「私」を冷笑する「アリストパネス」↓美女↓中年男↓ワイフ↓子供、「私」↓「私」を逮捕せんとする秘密警察の男↓美女（のかけの大金持アリストテレス・ソクラテス・何某）↓中年男↓ワイフ↓子供といったヨコの系列のほかに、私↓アリストパネス↓アリストテレス・ソクラテス・何某といったナナメの系列、あるいは、（第二の古代アテナイの）「私」↓（現代ギリシアの）子供↓（現代日本のミニ・スカートの）美女↓その第一の私、第二の「私」、第三の「私」をともに重ね合わせたところで一挙に逮捕せんとする秘密警察の男（彼もまた、私、「私」、「私」の一体化同様、すでに時空を超越した存在となっていて、つまり、歴史のいたるところ、地理のいたるところ、どこにでも存在した、そして、今も存在する、いや、これからも存在するだろうところの超越神のごとき男なのだ）というような大循環もまた成立させているのにちががなく、それを描こうとすれば、これはもう、すべてをややこしいむらがりの網ごとすくいにとって、その網目のからみぐあいを、いろいろなかたちで提示して行くほかはない——つまり、ここに生れて来るのは「全体小説」に対して「全体旅行記」というようなもので、そこにあるのは、真実と虚構、体験と思想のからまりあいであって、これはややこしくて困るが、しかし、現在の世界というものの、たとえ、それが世界のひとかけらであらうと、そんなにでもしななければ、なかなか描ききれるものではなからう。いや、そうやってみたところで、描ききれなかったもののほうがはるかに大きくて、それはもうどうにもならないしろものだが、すくなくとも、描ききれなかったことで、その大きさは推測することができる。